

私のはんせい記

～津波と建築～ ①

建築家 三木 哲

● 2011年3月11日

2011年3月11日午後14時46分、私は北新宿の共同設計の8階の書庫にいた。突然建物が揺れ始め、鋼製2連4列の書架がぎしみだした。思わず押え付けた。地震時に転倒しやすい書架は3列の頭繋ぎを取り耐震補強してあった。

揺れは長時間収まらず、経験したことがないほど長い時間揺れ続け、6分以上継続していたと思う。

多くの建物を破壊した阪神大震災の揺れていた時間は、僅か15秒間だった。阪神大地震に比較すると、かなり長時間揺れが持続した。

揺れが収まると所内の地震被害を見て回った。

設計室のカタログが書架から2～3点脱落した程度で湯沸室の食器類も無傷であった。

FMRラジオは震源は東北沖で都内の震度は4と放送した。

弊社の建物は新耐震設計法以降に建設され、2～8階は主にワンルームマンション、1階はコンビニエンスストアが入居し小滝橋通り側の構面は2～8階がバルコニー、1階は独立柱が並びピロティ形状ではある。

建物に地震被害のひび割れなどは全く見られず、エレベーターも通常通り動いていた。

共同設計の地震被害は全くなく、揺れの時間の長さだけが記憶に残った。

首都圏のJR、地下鉄、私鉄は地震被害点検のため運転停止し、再開の見込みは立たないと放送された。

この時、共同設計の事務所には私を含めて5名のスタッフが働いていた。全員、帰宅困難な状態になった。

運転再開の見込みが立たなければ、再開する迄仕事をしようと話し、徹夜覚悟の残業の腹を決めた。

5時を過ぎると小滝橋通りは歩いて家路に向かう人々の群が徐々に増えてきた。小滝橋通りは新宿駅西口から都バスの小滝橋車庫を通り、中野方面の山手通りに抜ける都道で、共同設計の向かいには新宿消防署が、並びに青果市場があり、バルコニーからは、戸山ハイツの高層マンション群が眺望される。

新宿駅と反対方向に向かう小滝橋道路の人通りが増え始め、やがて両側の歩道が一杯になった。

今月号より「私のはんせい記」は、新シリーズ
「津波と建築」編に入ります。 (編集部)



▲2011年3月11日19時ころの
小滝橋通り



◀共同設計の設計室の様子。
カタログが書棚から落下

新宿周辺の高層オフィス街等で働く人の内、徒步で帰宅可能な人達ではないかと思われた。7時を過ぎるとピークをすぎ、徐々に入通りは減っていった。

大久保駅の近くにトルコ人が経営するトルコ料理店がある。小滝橋通りの人通りが減り始めたころ、この店に電話すると「営業している」と返事があった。スタッフ全員と出掛け、トルコ料理のフルコースを時間をかけて楽しんだ。

店主に聞くと、トルコはユーラシアプレート、アフリカプレート、アラビアプレートが複雑に衝突していて、二つの横ずれ断層に囲まれた国だそうである。地震が多発し1999年8月にM7.6が発生し、1万7千人が死亡、600万人が家を失う大地震に見舞われたばかりだそうである。普段から地震対策をしていると言う。

報道によると、多数の「帰宅困難者」が首都圏の主要駅に発生し、その対策が急がれるとされた。

夕食後、ラジオを聞きながら仕事し鉄道の再開を待つた。今回の地震は、1995年の阪神大震災と異なり建物の倒壊は少なく、東北沿岸に予想外の巨大な津波が押し寄せ、津波による被害が甚大なようだ。

夜明け頃、私鉄は徐々に運転しはじめた。

3月12日には事務所は休業とすることに決定し、帰宅する私鉄の方面ごとに退社した。

小田急線の再開は遅く、夜明け後に帰宅した。

大久保界隈はアジア系のエスニック料理店が集積している。

その後、余震が続き、原発事故も重なり、地震慣れしていない韓国料理や中華料理の店主は本国に帰国し、営業再開に1年以上要する店もあった。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。